JID NEWS
社団法人　日本インテリアデザイナー協会月報
1994　10

IFI '95 NAGOYA
インテリアー新しいうねりの創造
INTERIORS : NEXT WAVE

1994年「JID賞」の選考を終えて

選考委員会委員長　島崎　信

名称も1994年「JID賞」と改められた旧「協会賞」に、インテリアスペース部門、インテリアプロダクト部門及びインテリア研究、著作、業績部門の3部門が今年より設けられることとなった。そしてその3部門賞の内の傑出したものを「JID大賞」とすることと定められた。

昨年度中にデザイン、完成された作品等を選考の対象として、広く公募され6月10日の〆切時に、インテリアスペース部門37点、インテリアプロダクト部門10点、インテリア研究、著作、業績部門2点の応募をみることが出来た。新しい内容での公募によるものとしては、手ごたえのある数とその作品内容であった。

提出作品のスライド、資料等にもとづく第1次、第2次審査を重ね、候補作品の現地審査と追加資料の提出等による第3次審査の結果、別記の通り決定した。

3部門のJID賞の作品の内、特に「大賞」に相当する作品は無いものと判定して、本年度は「該当者なし」という結果となった。

インテリアスペース部門については、建築作品との区別の付きにくいものから、生活臭あふれた空間、アートピースと広い作品の範囲となっていた。

受賞作の赤坂作品は、自社の創立90周年記念事業として、自社スタッフによる設計、建設という一般事例と

目　次

●1994年「JID賞」の選考を終えて …… 1
●JID賞を受賞して …… 2
特集/全国から5000人が参加、'94オール飛騨・高山木のふれあいフェスティバル …… 5
●飛騨木工連合会とのタイアップ …… 5
●飛騨・高山の今後への展望 …… 6
●皆様への感謝とこれから …… 6
●日本の木の椅子展を終えて …… 10
●交流・木の椅子プロトタイプ展を終えて …… 10
●交流・木の椅子プロトタイプ展に出品して …… 11
●IFI '95 NAGOYAと飛騨高山 …… 11
●ふれあいパーティーの「司会役」をつとめて …… 12
●媒体側と人間的つながりを …… 13
●1泊2日のフェスティバルツアー …… 14
●木のふれあいフェスティバルに参加して …… 14
●平成6年度第2回理事会報告 …… 19
●「日本のデザイン1950年～」フィラデルフィア美術館に招待されて …… 21
●新宿・OZONE見学とJID事務局訪問 …… 22
●会員の異動 …… 23

は若干異なる作品である。円環にイメージを求め、半ば地中に埋め込まれた一般的な意味でのエレベーションを持たない建物で、その結果外部空間であるオープンスペース、中庭等がインテリア空間としての性格を持つようになって来ている。インテリアへの外光の取り入れ方や開口部のプロポーション、視線の扱い方に高い評価がよせられた。このような高密度の空間が、使い手の意識や経年変化の下で充分に維持されてゆけるか、というこれからの関心を抱いている。

受賞作の川上作品は、ステンレスを使用したタペストリーの素材への姿勢と、エントランスホールという大きな空間に対しての積極的な整合性が評価された。建築の計画当初より参画し、空間造りの主要な要素としてのタペストリーのデザインとステンレス等の造形的処理に新鮮なものを感じさせていた。

インテリアプロダクト部門では、試作的なものやファーストプロダクションが数年前のものなど多彩なものが応募されていた。

受賞作の寺原作品は、椅子としての最小限度の必要要件以外のものを、そぎ落したフォルムと構造の造形性が評価された。高い木材の加工、接着技術によって、強度上の JIS の規定もクリアし、尚スタッキングの出来る椅子としての新しさに注目したい。

インテリア研究、著作、業績部門では、その内容に対する理解が充分に得られなかったのか、ごく少数の公募に終り、JID 賞に該当する作品等を見出すことは出来なかった。

しかしながら、「世界の椅子展」の企画、実施についての、発想と地道な努力は、日本のインテリアデザインの将来に対して力となるものとして、その意識と意欲を大きく評価して「奨励賞」を新たに設けることとした。

アフリカを始めとするヨーロッパ、アジア、アメリカの地域、風土と人間性が表出した収集椅子の数々は、類形化の傾向にある近代椅子の方向に考える場と示唆を与えてくれる機会として評価したい。

展示品及び展示方法については、学問的な分析と展示品のバランス等、若干の不足を惜しむ意見もあったことを付記しておきたい。

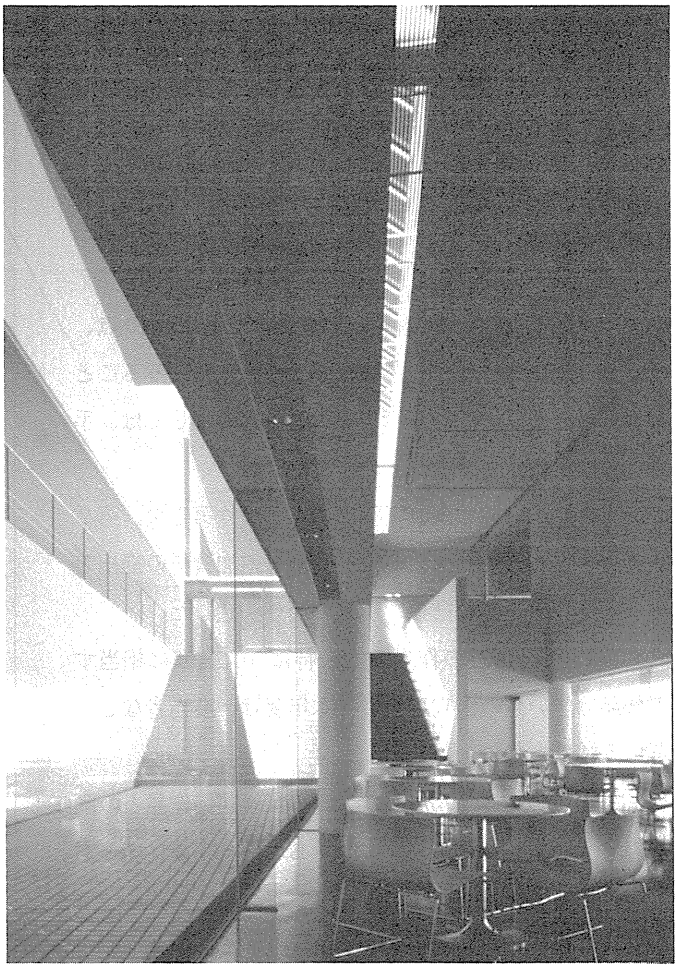
新しい規定の下に発足した「JID 賞」の第 1 回であったが、その審査過程に於て具体的な事項に於て、次回への重要な示唆となることを多く見出すことが出来た。選考委員会としては、これらの経験をもとに、来年度の活動への充実を計りたいと考えている。

JID 賞/インテリアスペース部門賞を受賞して「始まりに思う」

赤 坂 喜 顕

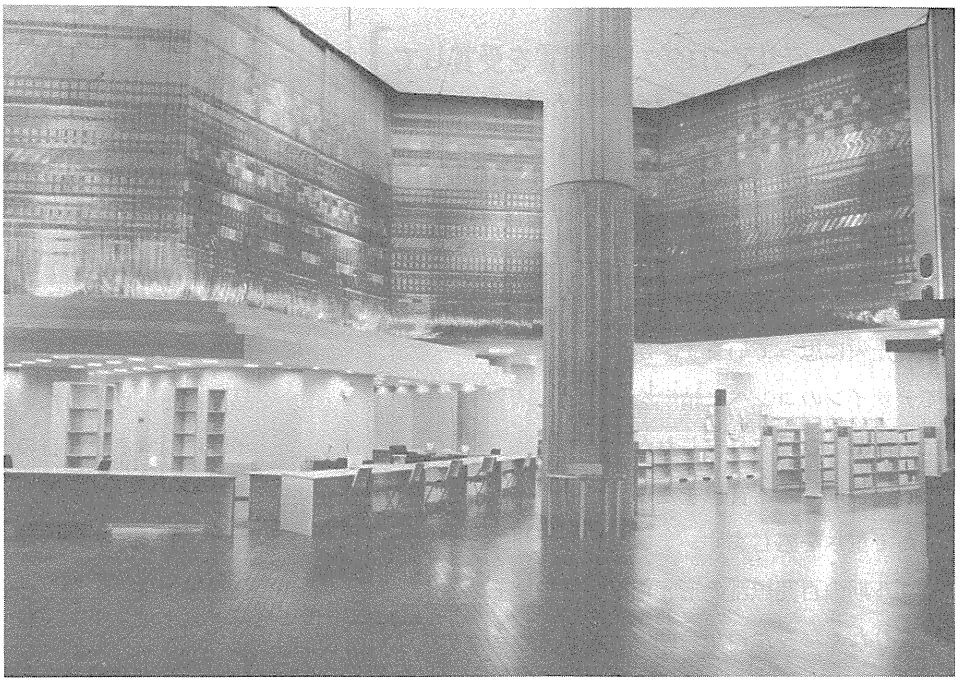
幸運にも賞を頂くことになったこの建物は、竹中工務店の創立90周年記念事業のひとつとして計画されたもので、数多くの関係者の協力により約 4 年の歳月をかけて完成したものです。また、完成して約 1 年が過ぎて初めて頂く記念すべき賞なので、関係者を代表して審査員の方々に心から感謝の意を表したいと思います。

巨大というより広大といえるこの研究所の大きな特徴は、建物周辺をグリーンの斜面で覆い閉じた構成の中に、



赤坂喜顕（竹中工務店）受賞作品

巨大な円で統御された白い幾何学の空間が配列されていることです。研究所ですから、機能をまず優先し、仕上げらしい仕上げはなく、すべてが簡素なペイント塗装で出来ていますが、研究者にとって重要な創造性を高めるため、室内・外共に豊かな空間容量（スペース・ボリューム）の確保がまず第一に考えられています。そこでは一般にいうインテリアとエクステリアという境界はなく、様々な外空間と内部が相互に貫入し合いながら作り出す光と影のドラマが意図されています。つまり、すべてがインテリアでありエクステリアでもあるのです。



川上玲子受賞作品

私達は常日頃、ランドスケープから建築そして家具やサインに至るまで、一貫した思考や感覚を、絶えずすべてに表現したいと思い努力してきましたが、今回それがインテリアの部門で認められ大変光栄に思っています。

賞を受けることは結果でなく“始まり”を意味します。それは今後の飛躍への期待として与えられたものと、改めて気持ちを新たにし精進していくつもりです。本当に有り難うございました。

JID賞/インテリアスペース部門賞を受賞して「アートの役割と建築の一部」

川　上　玲　子

長年、仕事を続けてきたなかで今回の横浜市中央図書館のタピストリーは、私にとって最初で最後の大仕事ではないかという気持ちで2年間没頭してきました。

その作品で今回、「JID賞」を頂くことになり、大変うれしく思っております。

図書館のメインエントランスの吹き抜け部、壁面を占める180㎡のタピストリーは、建築内部の基本設計の初期の段階から参加し、アートとしての役割と同時に建築の一部であるという私の考えを表現することが出来た仕事だと思っています。

賞を頂くという結果になった仕事のチャンスを、前川建築設計事務所より与えて頂いたことが、私にとってはこの2年間、作品の新しい素材、手法、全ての面で時間をかけて研究することもできました。

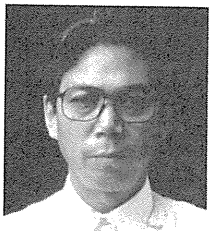
賞を頂けるような仕事に恵まれたことは、自分自身の中に潜在していたテキスタイルワークに対する意識を、言葉だけでなく作品を通して表現出来たことに大変感謝しています。

今回は今までの大部分が自分自身の範囲で製作可能な作品と違って、織物という発想からのステンレス素材の性格分析、織り組織の技術開発、柔らかい糸のイメージを硬いガラスで表現するために、ガラス工房での試作、図書館という公共の建物の吸音効果、諸々の条件をクリアーするために1年以上費やし、その間、最終的には私のコンセプトである、人の気持ちに安らぎを与える建築空間のテキスタイルアートを目ざしたタピストリーとして完成させるために、多くの方たちの協力があって出来た作品です。

20年、50年と時代に合わせてデザインを変化させながら使われることを意図したタピストリーに賞を頂いて新たに仕事への意欲が湧いて来ました。

JID賞/インテリアプロダクト部門賞を受賞して「原点に戻った発想から」

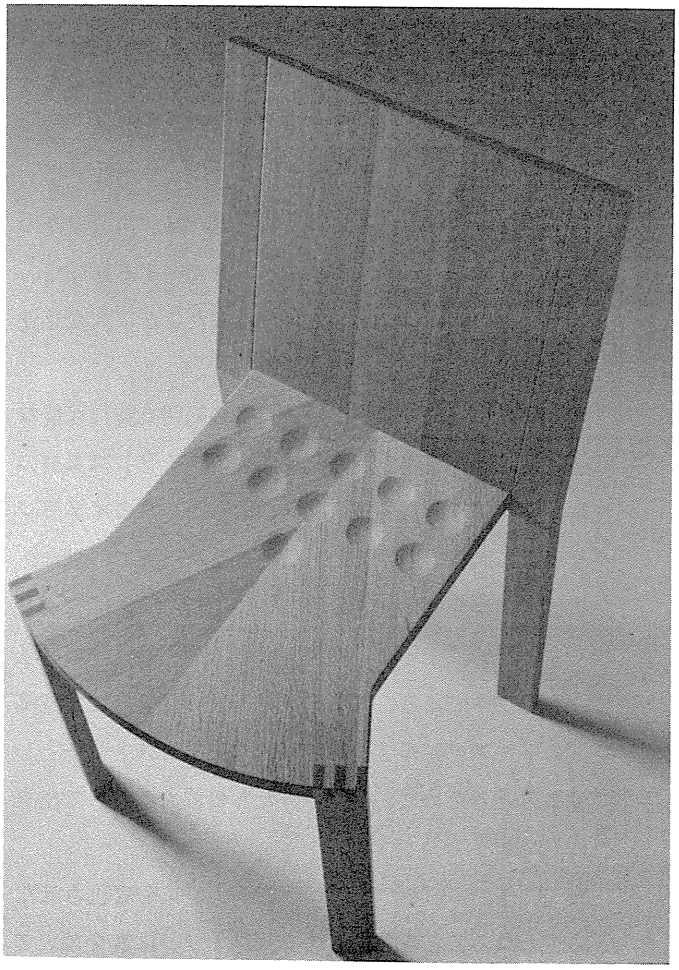
寺　原　芳　彦



この度、伝統ある「JID賞」を賜り光栄に思っています。かつてデザインのコンペに情熱をかたむけたことはありましたが、実際の仕事に対する賞はまたひとしおで重さを感じます。

バブル期の百花繚乱の形、色が鳴りをひそめる頃、原点に戻りたくなったのが今回のデザインのきっかけでした。必要条件を抽出し、形と技術の整合性を見いだし、表現したつもりです。すぐれた技術なくしては成立たないことを痛感しました。長年のおつきあいであります㈱アイダの相田氏の協力あってのことと思っています。

結果として理屈っぽい椅子になってしまいましたが、一見はそう感じないという意見も多いのでほっとしているのが正直な気持ちです。ふりかえってみると、自分で言うのもおかしな話ですが、今までは比較的真面目なデザインが多かったように思われます。



寺原芳彦受賞作品

先日学生を引連れミラノのメンフィスのギャラリーに行ってきましたが、かつての華々しさはないものの、造形的には一段と練られた内容であると感じました。特にホラインの作品には共感を覚え、“理屈っぽくない作品”にもトライしたい気分になりました。と同時にデザインに対する欧・日の土壌的資質の違いをまだまだ感じました。

「JID賞」がインターナショナル化し、多面的に波及効果が生じて欲しいと思っています。

JID賞/奨励賞を受賞して「これからも、やりつづけたい」

鈴木　恵三（BC工房）

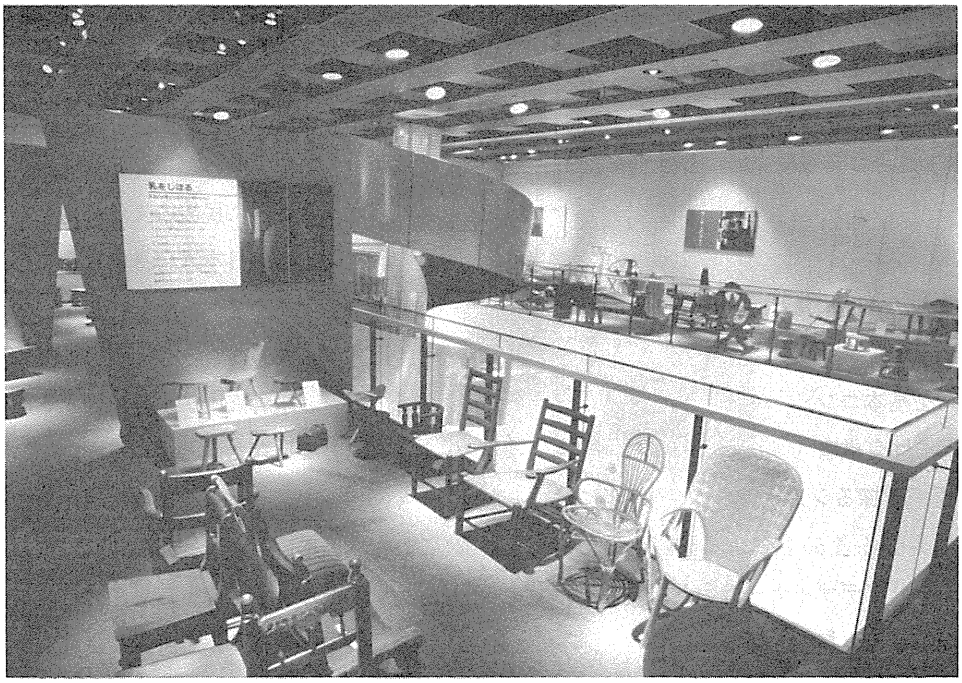
今まで家具のまわりのいろいろな展覧会を企画してきました。その多くは家具地場産業の展覧会であったり、家具デザイナーの作品展であったりしました。対象は業界関係者などの家具のプロたちです。こうした家具のプロたちは、なかなか素直に感動して喜んではくれませんでした。

今回の世界のプリミティブな椅子の展覧会では、ターゲットがいわゆる素人の方々です。しかしながら、子供から学生、若いOL、主婦、サラリーマン、おじさん、おばさんまでもが興味深く椅子を眺め、椅子に座ってくれて素直に喜んでくれました。

こうした椅子の展覧会に1万人もの入場者があったこと自体予想外の驚きであり、これからの自信にもなり、椅子の研究と展覧会企画への励みにもなります。

JID賞／奨励賞も同じような予想外の驚きであり、これからの励みになります。

「日本の木の椅子展」「アジアのプリミティブな椅子展」「世界の子供椅子展」など、椅子の研究と展覧会をこれからもやりつづけていきたいと考えています。



鈴木恵三受賞作品

特集/全国から5000人が参加、'94オール飛騨・高山木のふれあいフェスティバル

飛騨木工連合会とのタイアップ

理事長　長岡　貞夫

前号のJID NEWSで既報のように、協会が飛騨木工連合会に協力して行われた、〈'94オール飛騨・高山木のふれあいフェスティバル〉は、9月6日から11日までの6日間にわたって現地で開催され、多数の来場者を集め盛況裡に幕を閉じた。

昨年来、当協会では展覧会委員会が中心になって、高山の実行委員会とフェスティバルの核になる催事について企画し、日本の木の椅子展のほか二つのコアイベントをJIDの受託事業として実行した。

JIDにとって、地場産業と一つの催事を企画から実行まで全面的に協力して行うのは今回が初めてであり、テストトライアルとして貴重な体験であったと言えよう。

幸いにして、本事業が試行錯誤しつつも大きな成果を収めたことは、企画の妥当性もさることながら、高山のフェスティバル実行委員会、JIDの展覧会・交流委員会など多くの関係者の熱意と努力によるものであり、ここに改めて皆様に厚くお礼を申しあげたい。

バブル崩壊後、長引く経済の低迷のなか、新しいモノづくりの視点をもとめて、生産者とデザイナーがお互いの業界の発展のために、共同作業した今回の事業の意義は、今後の両者の新たな結び付きの一つの在り方を示唆したものとして評価されよう。

最近、一部で空洞化が囁かれる家具産業にとって、真の付加価値創造のために互いに協力し、より多角的で密な交流を計ることが地域産業の新たな発展と活性化につながるものと期待される。

いよいよ来年の〈世界インテリアデザイン会議－IFI '95 NAGOYA〉の開催まで1年有余にせまってきた。現在、実行委員会では骨子となる、会議のプログラム、事業の構想を精力的に練っているが、会議分科会の一つとして移動セッションが飛騨・高山で行われ、〈木〉をテーマにしたシンポジウムが予定されている。来年、再び歴史ある高山で、各国のデザイナーも交えての有意義な情報交換と国際交流が行われる共に、新たな企画による多彩なイベントの開催が期待されよう。

飛騨・高山の今後への展望

㈳飛騨木工連合会理事長　関　道明

オール飛騨高山木のふれあいフェスティバルは今回で3回目の開催となります。「伝統文化とデザインの隔合」を基本コンセプトとし、'90年には有識者による飛騨高山の将来を探るシンポジウム、'92年には、アセアン6ヶ国の業界関係者50名による国際会議、そして今回は日本インテリアデザイナー協会との共催イベントの開催へと続いてきました。

今後は来年名古屋で開催される世界インテリアデザイン会議分科会の誘致、その後は行政の全面的な支援を受けて国際的なデザインイベントの開催へと続く予定です。その間には、国の地方拠点都市構想による世界民族文化村の建設、その中の施設として世界民族文化ホール、家具を中心とした歴史博物館、そして飛騨家具の常設展示場の建設等、木をテーマとしたビッグプロジェクトが計画されています。木のふれあいフェスティバルは、これらのプロジェクト推進の要となるイベントとして位置づけられており、飛騨木工連合会の責任は本当に重大です。

今回のフェスティバルが日本インテリアデザイナー協会の全面的な協力により、大変高い評価を得られ大成功を納めることができたことは、これらの地域開発に、はずみがつくばかりでなく、飛騨の未来づくりに強力な支援者が得られたように感じております。

私は家具とは正に民族の文化そのものであり、家具業界の国際化とは、日本人自身の文化に根づいた家具づくりであると考えますがいかがでしょうか。

今回結ばれました貴協会との協力関係を今後一層深めさせて戴き、飛騨高山が世界に通ずる家具産地になれるよう努力していきたいと思います。

今回のフェスティバルは我々にとっては大成功でした。これも本当に協会の皆様方のご協力のよるものと心より感謝しております。今後も貴協会との関係を深め、共に成長し発展できることを心より願うものであります。

皆様への感謝とこれから

本部・展覧会委員会委員長　岩倉榮利
副委員長　鈴木惠三

●日本の木の椅子展

ご協力ありがとうございました。

100脚の椅子の収集にあたって、協力して下さった多くの皆様に感謝しております。

JIDでしか出来ない。JIDだから出来た。「日本の木の椅子展」だったと思います。いまだに整理、研究されていない分野とは言え、やればやる程、奥の深い分野だと感じざるを得ません。たった1年程の時間の中で、まあ、「よく集まった」が実感です。

「日本の木の椅子展」の展覧会は終わったようであり、まだ始まったばかりの気もしています。JIDがやりつづけなければならないテーマだと思います。

今回、6日間の開催期間で5000人の入場者があったことを考えれば、日本中の皆さ

左、木工連理事長と"学生家具デザイン大賞"受賞者

んに、より多くの皆さんに、「日本の椅子の歴史を知っていただける展覧会」を、開催する必要性を感じています。

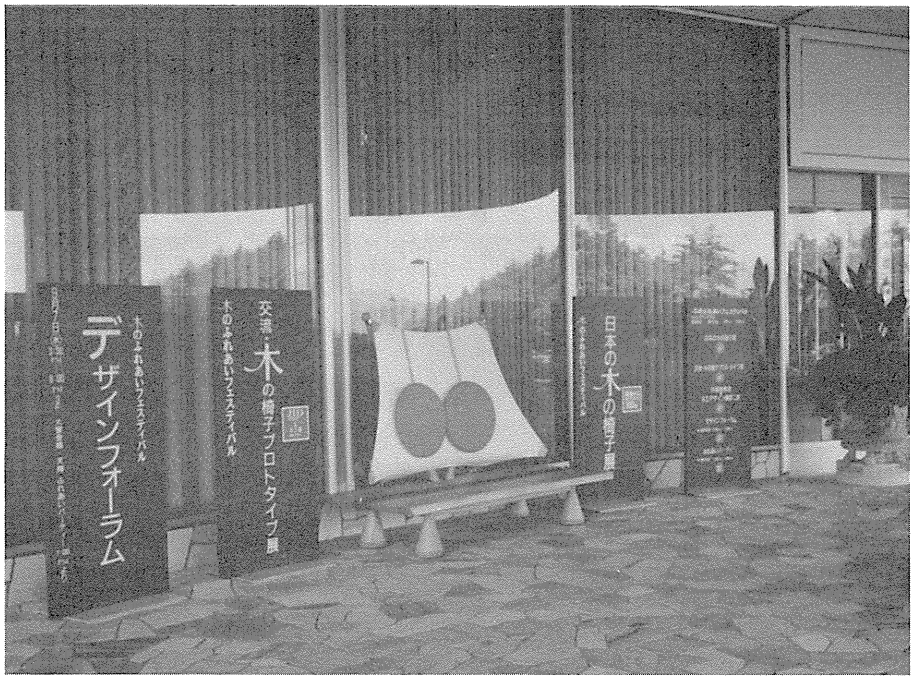
・IFI '95 名古屋でのより充実した「日本の木の椅子展」の開催にむけて、
・「日本の木の椅子」の出版にむけて、
・大きくは「日本の木の椅子美術館」づくりにむけて、JID メンバーの皆様のご協力をお願い申し上げます。

追伸、「これぞ、日本の名作椅子と思われる椅子についての情報を送ってくださいませ。よろしくお願いします。」

●交流・木の椅子プロトタイプ展

参加してくださいました、JID 10 人の皆様ありがとうございました。

またプロトタイプづくりに協力してくださいました高



「ホテルアソシア」1 階入口に置かれたサインボード

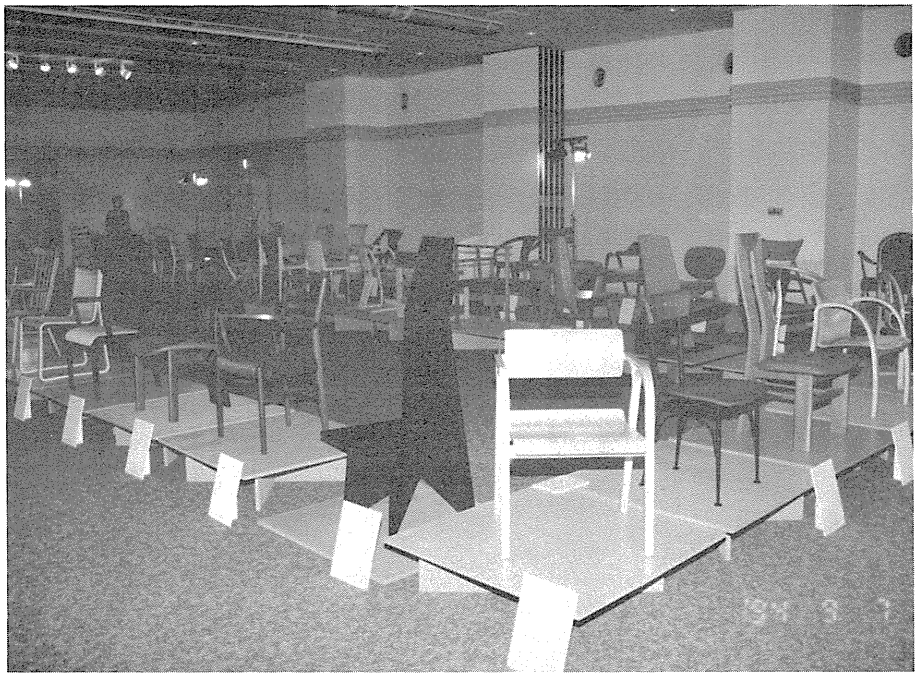
会場奥に、100 年 100 脚のパネル展示

山木工連の柏木工、日進木工、飛騨産業、大日、イバタ、プラスワンのスタッフの皆様、ありがとうございました。

長岡理事長が、よくクチにされる「こうした厳しい経済状況の中で、私たちデザイナーが企業に対して、社会に対して、今、何が出来るのか問われている。」が、企画のベースでした。私達は、JIDの多くのデザイナーに高山の家具づくりに、積極的にかかわっていただく、第1歩にしようと考えました。

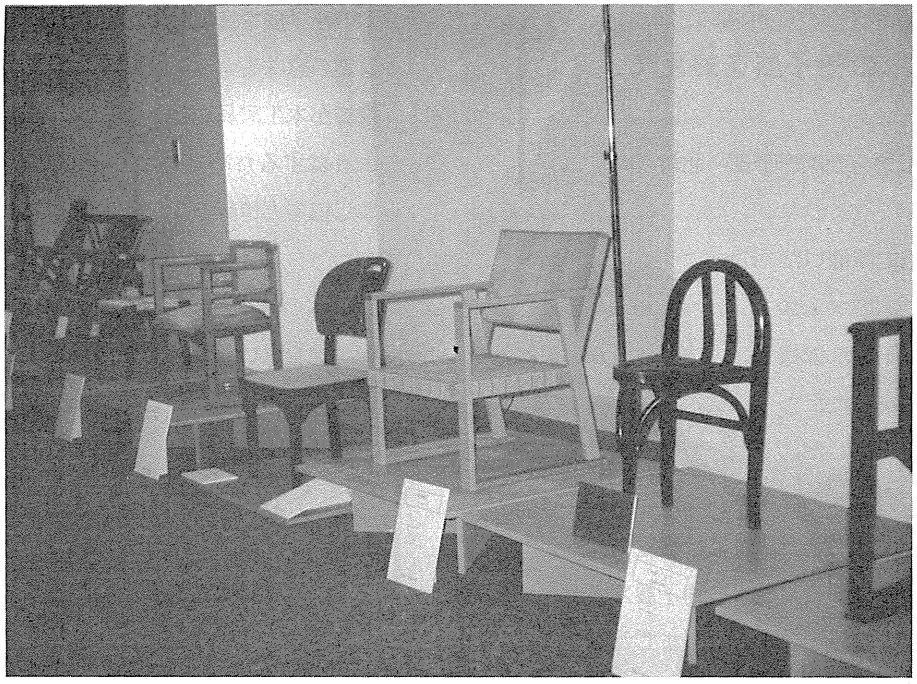
当初企画の、50人のデザイナー参加から、20人に、そして10という規模になってしまいましたが、第1回から、第2回、第3回に続けることのできる企画と考えています。今回は、椅子デザインを得意とするベテランの皆様10人を指名させていただきましたが、来年度には新たな10人に参加していただけるようにしたいと考えています。

今回の、第1回「交流・木の椅子プロトタイプ展」の中から良い商品が生まれ、メーカーにとって、デザイ



100年100脚で埋まった「日本の木の椅子展」会場

「日本の木の椅子展」の一角、右端は今回のために復刻



「日本の木の椅子展」の一角、中央におなじみの型而工房の椅子

ナーにとっての交流がより深まることを祈っています。

●デザインフォーラム

日本の木の椅子展のサブ・イベントとして企画した「デザインフォーラム」には、日本を代表する5人の家具デザイナーに登場していただきました。

川上元美さんはJIDメンバーではありませんが、喜多氏、清水氏、岩倉氏の3氏はJIDの中核メンバーであり、九州から参加の佐々木敏光氏はこれを機会にJIDへ入会予定です。

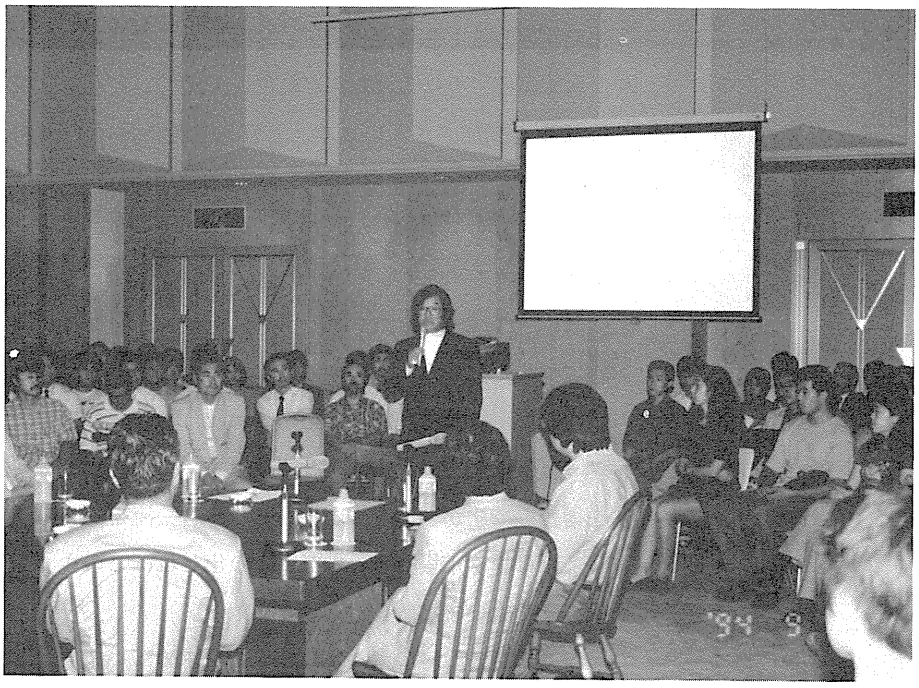
JIDの誇るJIDメンバーの人材アピールの場でもあった訳です。

ふれあいパーティの前のわずか2時間半の時間でしたが、5人のデザイナーの椅子デザインへの真面目な意見を聞くことができ、300人余りの参加者からは、もっとこんなフォーラムをやってほしい要望をもらいました。

ウィークデーの午後、高山という遠隔地にもかかわらず、300名を越える参加者が集まったことは予想外のことでした。当初は200名の予定で設定した会場プランでしたので、あわてて100名程の席を作り対応した次第です。

パネラーに指名させていただいた5名の皆様、フォーラムに参加してくださったJIDメンバーの皆様、ご協力ありがとうございました。

（司会・進行担当　鈴木惠三）



「デザインフォーラム」会場で挨拶する長岡理事長

日本の木の椅子展を終えて

㈳飛騨木工連合会副理事長　北村　斉

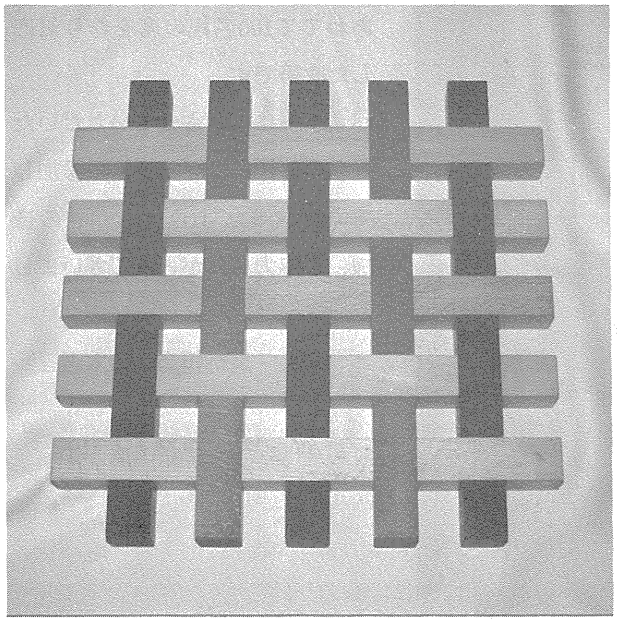
この度の飛騨高山で開催いたしました「木のふれあいフェスティバル」では、JIDの皆様には多大なるご協力をいただき誠にありがとうございました。

お蔭をもちまして、フェスティバル全体として大きな成果を上げることができました。これは一重に貴協会の絶大なるご協力と、特に〈日本の木の椅子展〉の企画があって、成功への大きなポイントとなりました。

事後、㈳飛騨木工連合会の反省会におきましても、インテリア業界史上はじめてというこの催しは各界他方面の方々からも称讃の声を聞き、今后もこのような展示会を是非続けてほしいとの意見も数多く報告されました。当然なことながら木工連・会員各社も深く関心を示し、今后の創作活動（物作り）の基本となるとして、大いに評価されておりました。

物作りをする立場として、新商品開発ということは、単純なことではありません。

古い良き物をよりよく知ってこそ、新しい物は、どうあるべきかを考え、その上で新鮮なアイディアに結びつくことになると思います。



飛騨と「幻の千鳥格子」

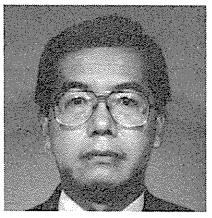
木の椅子展を拝見して、あらためて“温故知新”という言葉の意味をもう一度かみしめた次第であります。

飛騨が木工家具産地として、何ごとか世界に発信できるようにするためには、この度のようにJIDの皆様からのご協力と情報交換が何よりも大事なことだと思います。

この木の椅子展をスタートとして、JIDの皆様には飛騨産地を永い目で見ていただき、より一層の相互交流をさせていただきたいと切に願っております。

交流・木の椅子のプロトタイプ展を終えて

㈳飛騨木工連合会専務理事　堺　俊行



飛騨には「幻の千鳥格子」といわれる組木の格子がありますがJIDの皆様はご存じでしょうか？籐で編むように1寸角の木材が左右・前后と組まれている格子です。なぜこのような事が出来るのでしょう。

江戸時代天領だった飛騨は、豪商達が家を造る時、おかかえの大工に腕を発揮させたくとも役人の目があった為、表だった処に贅沢が出来ず隠れた処にお金を掛け大工を育て楽しんだ。それが印籠につける根付けや千鳥格子として今日迄残っている飛騨高山、そんな伝統に培かわれた飛騨の木工技術に我々は誇りに思い木製家具造りにたずさわっております。

「木製椅子を造らせたらだれにも負けない」と言う頑固な職人がたくさんいます。しかし食堂セットの国内シェアー25％をしめる飛騨高山の産地の悩みはデザイン力です。良い職人がいるが良いデザイナーがいないのです。

今回JIDの皆様のお力添えで初めてプロトタイプ展を開催した訳ですが、当初は著名な先生方のデザインしたものが形になるだろうかと不安ばかりでしたが、地元メーカーも良く作り上げたと思います。折角接する機会を得たのですから、どうかそれぞれ今后交流を深め、出来るだけ早く市場へ商品として送り出せればこの企画も大成功と思います。

飛騨のメーカーの人々は皆様の力を求めています。しかし皆様と接する機会を作っても自ら積極的にアプロー

チをする勇気をもっていないのです。世界に誇れる産地になる為、是非皆様のお力を貸して下さい。最后になりましたが、直接デザインをしていただいた10名の先生をはじめ、JIDの皆様のお陰でこのフェスティバルが立派に終了出来ました事に対し厚くお礼申し上げます。

交流・木の椅子プロトタイプ展に出品して

関東事業支部会員　田辺　麗子

今回、平均年齢60才超のベテラン10人が選ばれて出品することになりました。

私自身もどうやら同時代人ということでお仲間にいれていただいたようです。その顔ぶれを見て、私は鈴木惠三氏をはじめとする若い委員会の考えのしたたかさ、時代感覚の鋭さに感心したものです。そして、尊敬する先輩デザイナーのなかで、今の自分の力が試されるという機会を与えてくださった皆様に深く感謝いたします。

私がここ数年また椅子をいじりはじめたのは、依頼されたわけではなく、人間、空間にこだわってじっくり仕事をしたい、ということです。慌ただしい公私の生活とバランスを保ちながら創作意欲を満足させ、形を残してゆく方法としては、私には椅子のデザインがあるということは幸せなことだと思っています。

今度の椅子は、「高齢者」と「対話」にこだわったものです。時間がなかったというのは言い訳になりますが、こなれないデザインに悪戦苦闘してくださったメーカーの皆さんには本当に感謝しております。

オブジェ的な椅子とは違って、木の椅子には時代を超えて真のデザインが求められていると思います。永年、家具のデザインに取り組んできたベテラン先輩の仕事ぶりをみて一朝一夕には本当の仕事はできない、ということを若いデザイナーにはくみ取っていただく、というのが今回のプロトタイプ展の意向だったのではないかと思います。

デザイナーとして、いつまでもみずみずしい仕事をしてゆきたいと思いました。

IFI '95 NAGOYAと飛騨高山

本部・展覧会委員会担当理事　山口　道夫

IFI '95 NAGOYA世界インテリアデザイン会議の丁度1年前に当るこの10月13日～20日に、IFI理事が来日し、東京、名古屋、京都を結ぶ中で理事会、プレシンポジウム、懇談会、各種打合せ、会場等の視察、レセプション等が開催され、いよいよJIDにとって記念すべき大イベントがカウントダウンの段階に入りました。

会員の皆様もすでにご存じのとおり、実行委員会のもと、各委員会で着々と実行準備を整えつつあります。

IFI '95名古屋・事業委員会としましても、国際コンペティション、各種展示会、関連事業の企画推進から実行計画へと、とても忙しい日程になって参りました。その計画の中に大きな展示会が3つ予定されていますが、その中の1つに、名古屋国際会議場/西棟・4号館「白鳥ホール」で開催を計画している展示会があり、インテリアに於ける日本の心、日本の伝統、日本の歴史、日本の人物を、切り口テーマとした、言わば『JAPAN INTERIORS展』が計画されています。そして、この会場のコアになる部分に、今回の「高山木のふれあいフェスティバル」で好評であった、『日本の木の椅子展』に展示した木の椅子をベースとして、出展を予定しています。

「交流・木の椅子プロトタイプ展」に10人10脚

日本の木の椅子の源流から近代、現代までの集大成を行い、また日本で製作された木製小椅子の調査、収集、復刻、分析を通じて、日本の生活文化・デザイン文化を探り、その研究成果を日本国内のみならず世界に向けて発信することを目的としています。

専門家の方々もこのように一堂に会した椅子を見ることはなかなか出来ず、多くの面で示唆に富んだ有意義な展示になる事は高山で実証済みですし、まして一般の方々や、海外の方たちには、なおさらのことと思われます。

この展示により、選択肢があまりに多く、混沌として先が見えにくい明日のインテリアを考察する糸口が、諸賢には必ず見つかるものと思って居ります。

今後、会員各位に対して、いろいろとご協力のご依頼を要請する機会も増えることと思います。この紙面をお借りして、宜しくお願いしておきます。

最後に今回の『高山木のふれあいフェスティバル』の成功と、JID関連の好成果に関して多くの面でお力添えいただいた会員の方々、高山現地の方々と諸機関、直接担当した本部展覧会委員長の岩倉氏、関東事業支部展覧会委員長の鈴木氏に対し、展覧会委員会担当理事として感謝の気持ちを表明させて頂きます。有り難うございました。

来年の、『世界インテリアデザイン会議』も宜しくお願い致します。

ふれあいパーティーの「司会役」をつとめて

関東・出版委員会委員長　岡部　史子

飛騨・高山“木のふれあいフェスティバル”2日目の7日夕刻より、ホテル・アソシエにて「第3回ふれあいパーティー」が開催されました。大盛況の「デザインフォーラム」の後ともあって参加者はゆうに300人を超えてパーティーは始まりました。

ひょんな事から司会進行を仰せつかった私は、噺家、柳家三太楼さんと共にくつろいだ楽しいパーティーにしたいと考えました。私の緊張をよそに賑やかに和やかにパーティーは主催者挨拶、ご来賓のご紹介、乾杯へと無事に進み、いよいよパーティーのもう一つの目的である“学生家具デザイン大賞”の表彰式です。残念ながら今回は、大賞該当者は無しと言うことで、金賞の受賞者から壇上にて授与式と成りました。

金賞を受賞した学生は、桑沢デザイン研究所、愛知県立芸術大学大学院、千葉大学、の在学生。3名の中ただ1人の女性である石川さんは、JID長岡理事長の教え子だそうです。当日彼女から“先生！”と声を掛けられる迄、気が付かなかったとかで、パーティーの間中、理事長はとても嬉しそうでした。全ての受賞者が揃い、彼

左より　司会進行、岡部史子、柳家三太楼さんと、インタビューを受ける稲本　正さん

中央右、喜多俊之会員（デザインフォーラムパネラー）

らへ会場から拍手が起きた時、それは家具業界の未来に向けての期待にも感じられました。

また、会場インタビューでは川上元美氏、稲本　正氏に貴重なご意見を頂きました。三太楼さんは時々可笑しい事を言っては会場を湧かしていましたが、彼のショータイムでは本当に楽しく盛り上がり、字遊びとでも言うんでしょうか、愉快な問題が出て、答えを当てた人は三太楼さんから手拭いのお土産を頂きました。

来賓の中に市長さんがいらして、言葉少な目に短いご挨拶されたのが印象に残っています。声が枯れていました。何しろ3日前の市長選で選ばれたばかりの、新市長さんだったのです。

パーティーも楽しく過ぎ、帰りのバスの案内を最後に何とかお役を終えました。が、私はその夜、夕食にありつけずに空腹で寂しく眠る事と成り、その上、緊張と絶食の究極ダイエットの効果も期待外れでした。

媒体側と人間的つながりを

関東・広報委員会委員長　森本　勉

昨年の早い時期から、今回の企画の概要は、委員長会議などで知らされており、広報委員会としてはマスコミ各社にJIDとしてアプローチする絶好のチャンスとして緊張していました。

幸い、吉良ヒロノブ委員長の手で、マスコミ各社の名簿の整理がかなり進んでいたので、その名簿をもとに、雑誌と新聞に分けてタイミングよく情報を発信すべく、媒体選別を行い、資料が整うのを待った次第です。

私は持論として、パブリシティーは媒体側との人間的なつながりが大切であり、そのためには年に数回、媒体側の編集長、あるいは担当者と面談の機会を作り、親しくなっておく必要があること、そして、「掲載をお願いするのだ」という心を忘れてはいけない、という考えを持っているので、今回は出来るだけ資料を“手渡し”したいと思っていました。

7月末から8月中旬に発行される雑誌の原稿〆切日ぎりぎりの6月24日に、展覧会委・副委員長の鈴木惠三氏から、資料一式を本部事務局にとどけた、という連絡が入り、27日に本部でそれらを受取り、室内、新建築、にっけいデザイン、商店建築、SD、建築知識、モダンリビング、アクシスの各媒体に参上し、口頭で説明を加えながら資料を手渡ししました。その他の媒体にも出向きたかったのですが、〆切日の関係もあり、約20社には事務局から発送してもらいました。

新聞各社には、この時点では開催日まで日数がありすぎるので、発送は見合せ、8月にリストアップした名簿にもとずいて事務局から発送してもらいました。朝日や

日経など主な新聞社には、参上し手渡ししたかったのですが、私のスケジュールの調整がつかず、郵送という手段をとらざるを得ませんでした。しかし、次の機会には是非、担当者と面談し人間関係を作りたいと思っています。

1泊2日のフェスティバルツアー

本部・交流委員会委員長　斉藤　武行

「日本の木の椅子」に拘り続けた展覧会委のメンバー。協会として初めてと思われるビッグな委託事業。木に愛着を持ち、説得し、そしてまとめ ―― 。

5月末に展覧会委／交流委合同のと言うよりも仲間として打合せを行って3ヶ月。あっと言う間に過ぎ去った。打合せの中で、楽しく素晴らしいイベントにきっとなると予想はしたものの、ツアーの呼びかけは決して多人数とは言えなかった。が、しかし、プロトタイプ参加の会員の諸先輩始め会員の仲間迄、オープニングの「デザインフォーラム」を皮切りに、「パーティー」「二次会」「三次会」とその熱気と乗りのいい雰囲気は、さすがJIDのキャラクターを垣間見せてくれた。参加者ざっと60余名。フォーラムの受付、パーティーの司会、機関誌「インテリアデザイン」の配布等、参加会員の一団となった協力でスムーズな運営であった。

1900年から現在迄、我々の諸先輩がデザインした木の椅子、いす。その解き放つ偉容と、モダンさ、人間らしさ、びっくりさえするカラー、フォルム。歳を超えてその威光は、見る人を釘づけにしてしまう。本当に素晴らしい。そしてまとめあげてくれた方々に感謝、感謝。

プロトタイプの椅子達も又個があり主張がある。形となり材料となって……。こんどはもっと沢山の人々に参加して頂き、色々な個性を一同に集めたい。

高山のロケーションを行政とのかかわりを持って、JIDの会員個々のキャラクターが素晴らしいパワーを結集し、こんなイベントが出来た。このフェスティバルを契機により親密な関わりと向上を高山の人々とのふれ合いの場としたい。来年は「IFI '95名古屋」が最大のイベントになる。JIDの会員と関係者がスクラムアップし、世界への発信としよう。その日の為に！

木のふれあいフェスティバルに参加して「実物と実感」

「室内」編集部　佐野　由佳

飛騨・高山に行ったのは個人的には初めてだった。山があって静かで古い街並があって、イメージの中の飛騨・高山はこんな感じだったけれど「日本全国どこの街も見分けがつかなくなってしまった現代だもの、飛騨・高山だってそうかもしれない」と、行く前は思っていた。諦め半分、過度の期待をいましめる気持ち半分である。

果たして高山の駅に降りたつと、予想以上に「その街らしさ」があったので安心した。「木のふれあいフェスティバル」で印象に残っているのは、「日本の木の椅子100脚展」「木工デザイン展」そして各社ショールームめぐりである。

木の椅子展では、これまで実物を見る機会の少なかった名作椅子がまとめて見られたし、春慶塗りというのはこんなにきれいなものかとびっくりしたのが木工デザイン展である。ショールームめぐりの面白さは、各社の建物なども一緒に見られることだった。会社の雰囲気というか、この家具はこんな所でつくられているのか、という実感を体験できる面白さである。これは、同じ家具を東京の見本市やショールームでみるのとは、ひと味違った味わいである。

産地へ行って家具をみる楽しみはここにある。街の空気が持っている歴史と一緒に物をみることができるのだ。

おまけに、飛騨産業㈱の旧本社屋の中に収蔵してある、大正～昭和初期にかけての椅子をみせていただいたりしたものだから、その想いは益々強くなった。

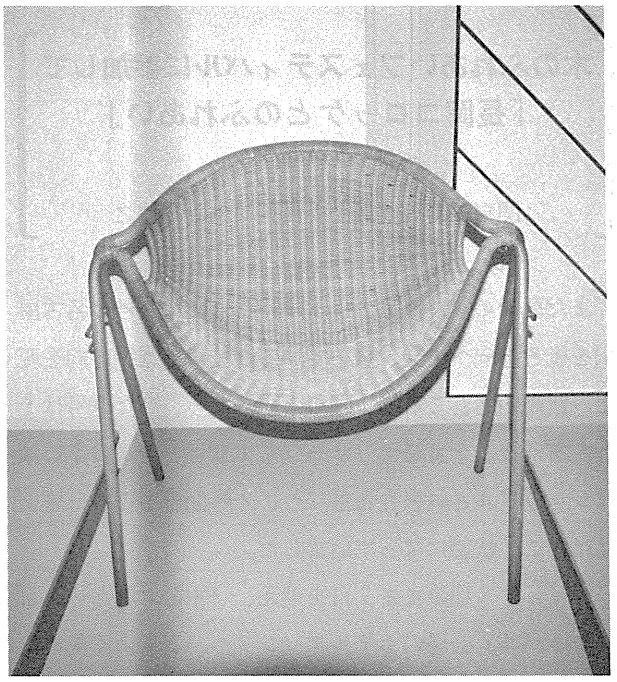
歴史は簡単に手放せるけれど、手に入れるのは難しい。飛騨・高山は古いものと新しいものが無理なく共に暮らしに溶けている。観光地という地の利もあるのかもしれないが、そのバランスのよさが駅前で感じた安心感の源だと思った。こういう街は、実は全国でも稀なのである。

木のふれあいフェスティバルに参加して「100脚の椅子とこれからの家具」

「モダンリビング」編集部　中島　早苗

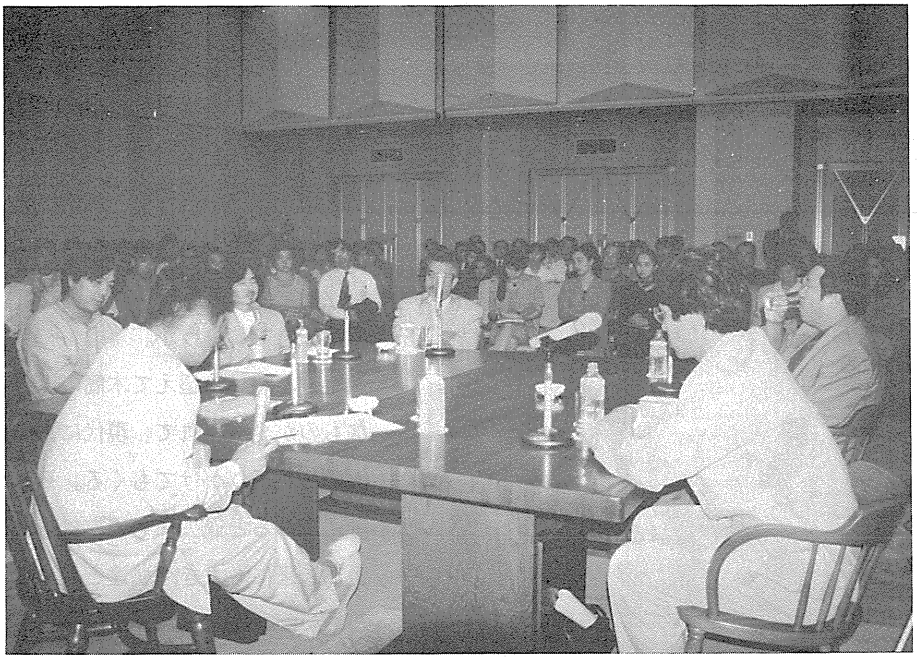
作今は企画展流行りだけれど、行ってみて満足する展覧会は少ない。しかし、今回の木のふれあいフェスティバル「日本の木の椅子展」は充実していた。100脚展示されるとは知っていたが、あんなに見応えがあるとは正直思っていなかった。メモを取りながら椅子をカメラに納めていったが、見たことのないものだけでもかなりの数になり、夢中で見続けて気が付くと、会場に入ってから2時間が過ぎていた。数十年前のデザインであるにも関わらず、今見ても、とても新鮮に感じられる椅子がたくさんあった。

しかし、100年間、優秀なデザイナーたちによって生み出されてきたせっかくの美しい椅子も、残念なことに今は買うどころか見ることすらできないものが多い。それらがもっと家庭で、公共の場で使い続けられていたら、どんなに日本人の100年間の生活に、楽しさと洗練をプラスしていただろう、と残念だ。どんな価値のあるものも、博物館に展示されているだけでは精彩は失われてしまう。人々の暮らしの中でこそ、生きるのだと思う。展覧会委員長の岩倉榮利さんもおっしゃっていたが、これからは、よいデザインとクオリティの家具を、もっと手軽に買えるようにすべきである。そうでないといいデザインも、使えない、買えない、見られないという、先人と同じ運命を辿ってしまう。せっかくの美しいデザインをお蔵入りさせてはならない。



一番インパクトの強かったデザインの椅子は、
産業工芸試験所・筐　敏生による休息椅子(1959年)

日本では一般の人が優れたデザインの家具を目にする機会も少ないし、買える場所も多くない。「デザインフォーラム」の話題にも上ったが、エンドユーザーはもうとっくに自分の欲しいものがわかってきているのに、デザインされたものの中に、肝心のそれがないのである。「買い手の立場になる」ことを忘れがちなメーカーと、エンドユーザーの間の大きな溝を埋めるのが、デザイナーやメディアの重要な仕事だ、と100脚の椅子を見て改めて感じた。



「デザインフォーラム」パネラー
右手前より川上元美、喜多俊之、岩倉榮利、清水忠男、佐々木俊光さん

木のふれあいフェスティバルに参加して「長岡コロッケとのふれあい」

関東・交流委員会委員長　山下　博之

まだ酷暑の続く9月6日13時40分ひだ9号は名古屋駅を後ろ方向へ出発、驚いていると岐阜で進行方向を変え一路高山へ、ここで一眠りと思ったら、ひだ9号は上下左右前後と全身をマッサージして歓迎、空洞の多い頭はシャッフルされ暑さと重なり、4時間掛るここは誰、私はどこ、状態になっていました。

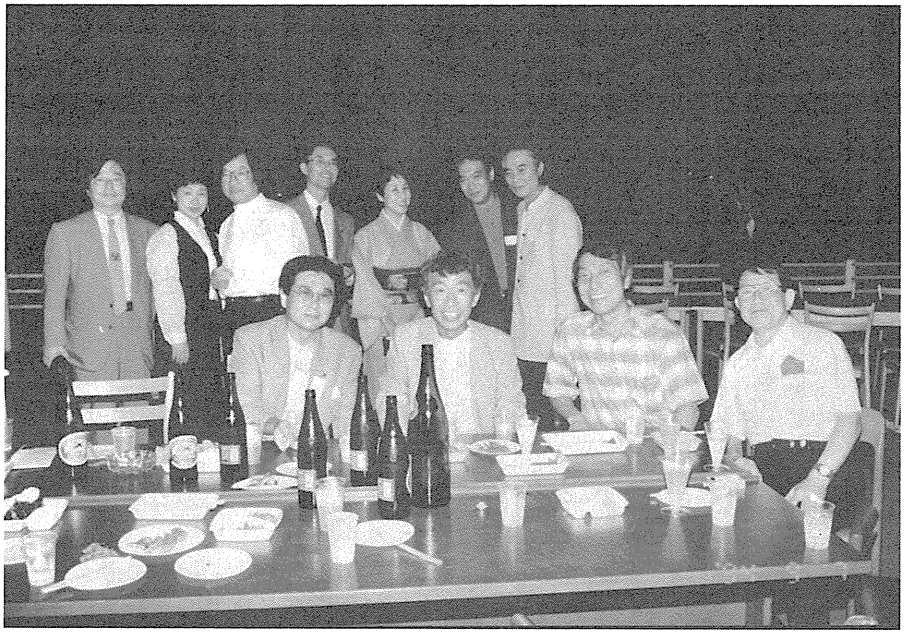
シャッフル頭のまま7日を迎え、『木のふれあいフェスティバル』会場のホテルアソシアへ、よくよく集めた100本の「日本の木の椅子展」、JID＆木工連デザイナーの「交流・木の椅子プロトタイプ展」をフムフムなるほどと興味深く見、「デザインフォーラム」会場へ、JID会員の顔、顔、顔、「室内」の佐野さん、「モダンリビング」の中島さんを含め、60数名の参加でした。立ち見も出る程の大盛況、鈴木惠三さんの自然体の司会でパネラーの方々のキャラクターが引き出され、面白く楽しくうかがえました。

その後、「ふれあいパーティー」に移り、着物姿もあでやかに岡部史子さん、柳家三太桜さんのおしゃれで軽妙な司会で、楽しくなごやかに進行し、あーぁここにも人生を間違えたお方が……デザイナーをやめて……

おいしい料理とお酒を戴きながら参加者の方々と歓談していると、JID会員の間でヒソヒソ、ヒソヒソ、「なが○○コロ○○」、「ナガオ○コロッ○」と聞えてくるのです。

あの幻の「長岡コロッケ」に今日、日進木工で会えると言う事で、JID会員は日進木工へ押し掛け、大夜間野外パーティーの中を「長岡コロッケ」「長岡コロッケ」と探しまわっていました。

「長岡コロッケ」は残り僅かしかなく、その1つを割った長岡さんは『アァーこれボクのコロッケじゃない』、よくよく聞くと、長岡さんは「長岡コロッケ」レシピー（作り方）を持って日進木工社長婦人へ3時間半、事細かにレクチャーし、主婦歴、ン十年の社長婦人はニコニコと話を聞き、こともなげに「長岡コロッケ日進風」に仕立あげ、『ニンジン』を入れてあったのでした。そして高山の夜は更けていったのでした。



日進木工社屋前、二次会の野外パーティー、「長岡コロッケ」はどこにと探していました

木のふれあいフェスティバルに参加して「生命体としての木」

中部・展覧会委員会委員　風岡　せい子

日常私達は何らかの形で木或いは木製の大小のものにかかわって生活しています。

今回、これを機に木について少し考えてみました。

木は両親あるいは遡のぼって祖父母の世代には、もっと素の形で身近に且つ必要不可欠な存在として、暮らしに根ざしていたことでしょう。マキをくべて飯を炊く、風呂を沸かす、時には洗濯の道具にもしたとなると、正に毎日の暮らしそのものだったのではないでしょうか。

一方、時代を超えて木簡のようなものが発掘されて、現代に古の人の心が語りかけてもくる。そう考えてみると過去にも現在にも、当然未来にも大きく私達と共に歩むものだと考えられます。

文明の発達で今、私達は他のエネルギーを利用しつつもやはり、

木に取り囲まれて暮らしております。科学エネルギーに支えられた暮らしの中にあって、よりナチュラルにと自然回帰を求めれば、木は切り刻んで或る空間の中に封じ込めるばかりではなく、外部にあって、より大きな空間を創り出す森としての機能にも目を向けねばなりません。

今回、フェスティバルに参加して、源流から現代までの椅子100脚を間近に見ることが出来たのは大変良い経験となりました。

『素と用と美』に触れ、改めて生命体としての木について考えさせてくれる良い機会になりました。鉄にしろ、木にしろ、石にしろ、真ものが主張しあって、ぶつかりあってデザインされた場で、いつも、木は他のものに負けず確かな主張を感じさせるものでもありましょう。そして、高山の地で豊富な木の種類に手を触れ、香りを嗅ぎ、しめり気を直接味わう場が展開され、切り刻んだものではなく、燃える大木からも魂を感じてみたいと欲深な事も思ったものです。

木のふれあいフェスティバルに参加して「木にふれて高山を思う」

関西・IFI '95委員会委員長　小宮　容一

9月7日（水）午前中、インテリアスクールの授業を終えたその足で、急ぎ新幹線、高山線と乗り継いで高山に入り、「デザインフォーラム」の後半に滑り込んだ。ホテル「アソシエ」の会場は300人余の聴衆と5人のパネラーで熱気に満ちていた。地元の若い人達の熱心に聞き入る様子は高山家具の明るい将来を示していたと思う。

フォーラム終了と次のパーティまでの1時間に「日本の木の椅子展」と「プロトタイプ展」を見る。常々学生に『我々庶民の椅子生活は、昭和30年代、公団の寝食分離集合住宅以来で、半世紀たっていない。諸君が椅子生活をこなし、習得することで次のデザインが生まれて来る。』等と云っている。木の椅子展に見る日本のインテリアデザイナー第1世代、渡辺　力・豊口克平・剣持勇諸先輩の作品は、民芸運動やスカンジナビアデザインの渦中であったとしても、日本人の生活行為と日本の住空間を十分にこなし、そして美しいデザインとなっているのを目の当りにし、その実力に感嘆した。

パーティでは九州、中部、関東の会員の方々と懇親。二次会、三次会、四次会と続いて就寝は朝4時であった。8時に関西の花田　眞氏からコレクトコール、シャワーし、朝食を摂って9時のシャトルバスに乗った、なんとバードな朝か。

学生コンペの作品展と体育館に地場の家具を見た。総じた印象は、確かに高山には、『匠』の心と技術は伝わっている。木の家具のデザインが手で触れ、刀物で彫って、

300名が集まった「デザインフォーラム」

起して行くものとするなら、高山の若い人々に受け継がれていると思う。しかし1歩離れて、日本人の生活と空間をトータルコーディネートする見地と、デザインのハイクオリティなセンスはまだまだと思う。JIDとして高山の家具産業に、勉強会や研修会など、今回の成功に引き続き、協力できるなら、私も微力ながらお手伝いしたいと思う。

木のふれあいフェスティバルに参加して圧巻だった〈日本の木の椅子展〉

九州事業支部担当理事　中川　千年

随分久し振りの高山行でした。高山市はわが町、九州の日田市と人口がほぼ同じ、四方を木々の緑に囲まれた山間の小都市で、かつて天領であり往時の面影を色濃く残す町のたたずまい等々、共通項が多いこともあって以前から特別の親しみを持っています。

今回はそうした思いとは別に、飛騨木工連合会とわがJIDが強い絆で結ばれて開催される初めてのイベントへの参加ということに意義を感じ、期待に胸をときめかせての高山入りでした。

まずはJIDにとってのメイン会場「ホテルアソシア」へ。ここでの圧巻は何といっても〈日本の木の椅子展〉です。日常の暮らしがある限り消え去ることのないエターナルデザインの数々、既に脳裏に焼きついている懐しい秀作等々、また初期の頃のものには初見参の逸物が多々あって興味は尽きるところがありません。椅子の生活の歴史がそれ程長くない日本に、これほど密度の高いデザインの累積があることに深い感慨を覚えました。

一方、同じフロアのエレベーターホールでの〈交流・木の椅子プロトタイプ展〉では、現地メーカーデザイナーの堅実な作品とJIDメンバー10人の遊び心に満ちた作品が対照的な出合いの場をつくっていました。

ここには私自身作品参加したのですが、こちらのイメージを現実のモノとの落差の激しさに顔色を失いました。事前の打合せや中間のチェックなど本来なすべきことを怠った結果です。痛切に反省しました。

大盛況となったデザインフォーラムは、パネラー各氏のデザイナーとしての生きざまが活写されて大変いい刺激になったと思います。そして交流パーティ、二次会、三次会と続きますが、それらのことなどを詳しく伝えるには紙数がありません。ともあれ、JIDが関与したこのイベントが〈オール飛騨高山〉の人々にとっても良い刺激と交流の機会になったと思います。展覧会委員会のみなさんの大変なご苦労に心から感謝申し上げます。

「交流・木の椅子プロトタイプ展」
右に現地メーカーのデザイナー作品、左にJIDメンバーの作品

平成6年度・第2回理事会報告

①日　時　平成6年7月20日（水）13：30〜16：30

②場　所　㈱リビングデザインセンターOZONE 8F
セミナールーム
東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー

③出席者　理事総数15名中（本人出席14名）
（理事長）長岡貞夫
（副理事長）泉　修二、栢原秀榮
（理　事）淺田弘之、浅野盛治、宇賀敏夫、
川上信二、小坂希八郎、白石勝彦、
中川帛子、中川千年
福田友美、山口道夫
森谷延周（事務局長）
（委任状）清水忠男
（監　事）榎田　均、金子誠之助

④議　題

Ⅰ．議　案

第1号議案　運営調整委員会（仮称）設置承認の件
第2号議案　後援・協賛名義承認の件
第3号議案　会員入退会及び会費免除承認の件
第4号議案　議事録署名人選任の件（2名）

Ⅱ．報告事項

(1)　各事業支部及び本部各委員会事業推進状況
(2)　平成6年度収支状況報告（6月末現在）
(3)　関東通商産業局関係報告
(4)　通産省関係人事異動
(5)　その他

⑤議　事

森谷事務局長より「理事総数15名中、本人出席14名、委任状1名で本理事会は成立した」旨報告。引続き、長岡理事長が議長となり議事に入った。

Ⅰ．議　案

第1号議案　運営調整委員会（仮称）設置承認の件

議長は事務局長に趣旨説明を求め、事務局長は資料に基づき、理事会の隔月開催に対し、諸案件の事前検討による理事会討議の円滑化のため、標記の委員会設置を提議した。討議に移り、検討課題に促した座長のもとで開催されること、そのための予算措置は担当委員会又は一般会議費を充てることなどの発言があった。議長は、承認を諮り、異議なく承認された。

第2号議案　後援・協賛名義承認の件

議長は、事務局長に説明を求め、事務局長は、下記2件について説明した。議長は、承認を諮り、異議なく承認された。

◎「第9回ライフスタイル'95展」　後援
1995年4月11日（火）〜14日（金）
主催　ライフスタイル展事務局/ジェー・イー・エス㈱

◎「国際陶磁器フェスティバル 美濃'95」　協賛
国際陶磁器コンペティション
1995年8月28日（月）〜8月30日（水）
国際陶磁器コンペティション入賞・入選作品展示
1995年10月28日（土）〜11月5日（日）
主催　国際陶磁器フェスティバル 美濃'95実行委員会

第3号議案　会員入退会及び会費免除承認の件

議長は、事務局長に趣旨説明を求め、事務局長は下記8件について説明した。議長は、承認を諮り、いずれも異議なく承認された。

入会　正会員（5件）

氏　名	支部	保証推進人
大谷竹男	関東	阪井　良種・鈴木　惠三
石川はるな	関東	大島　文夫・中川　帛子
川西康司	関東	森谷　延周・福田　友美
荻田幸子	関東	山本其観代・山品　元
高橋三太郎	関東	中村　昇・大阪　克彦

退会　正会員（2件）

氏　名	支部	
池上俊郎	関西	
早川昌直	中部	

会費免除　正会員（1件）

氏　名	支部	事　由
永島幹樹子	関東	会員規定第8条による

第4号議案　議事録署名人選任の件（2名）

議長は、宇賀敏夫、川上信二両理事の承認を諮り、異議なく承認された。

Ⅱ．報告事項

議長は、各事業支部については各担当理事、本部事務局については事務局長に活動に関する報告を求め、それぞれが資料を基に報告した。

(1) 各事業支部及び本部各委員会事業推進状況

- 関東事業支部（浅野）
  リビングデザインセンターOZONE見学企画のほか、「北海道支部設立に向けて土台づくり」に関して、組織委員会の派遣計画などを報告。
- 中部事業支部（宇賀）
  支部総会及びシンポジウム「風土に育つ木の文化」（参加者225名）などの開催結果について、たいへん盛会だった旨報告。
- 関西事業支部（栢原）
  新支部長就任のほか、活性化の方向及び外部団体との接触などについて報告。
- 九州事業支部（中川・千）
  支部例会及び「デザイン交流 in インドネシア」（9月22日～26日）の予定などについて報告。
- 選考委員会（浅野）
  新年度第1回選考委員会（7月13日）を開催、応募総数や第1次審査による絞り込みなどについて報告。
- 総務委員会（森谷）
  JIDパンフレット改訂版、IDカード制作、細則改訂など新年度の事業計画などについて報告。
- 組織委員会（淺田）
  会員増強、賛助会員対策、JIDの認知度の向上など新年度の事業計画などについて報告。
- 国際委員会（中川・帛）
  IFI理事会開催報告（アムステルダム）及び、今後は、外国からの情報を会員により良く伝えるようにしたい旨報告。
- 交流委員会（小坂）
  通産省住宅産業課とのコミュニケーションを図ったこと及び㈶伝統的工芸品産業振興会からの業務協力依頼、さらに、「木のふれあいフェスティバル」のツアー計画などについて報告。
- 広報委員会
  「木のふれあいフェスティバル」や「IFI '95名古屋」など本部・広報委員会としての役割を果たしていきたい旨報告。
- 出版委員会（福田）
  本年度の「インテリアデザイン」115号計画を検討した結果、これを改め、「会員作品集」としたい。これに対して、理事会から様々な意見が出され、継続して再検討するととなった。
- 教育委員会（清水）
  清水担当理事委任出席のため、特に報告なし。
- 展覧会委員会（山口）
  「'94オール飛騨高山木のふれあいフェスティバル」（9月6日～11日）に関して、実行組織、催事内容などを報告
  事務局長より、受託契約の内容などについて補足した。
- 報酬基準委員会（白石）
  委員長交代による引き継ぎ終え、今後はきめ細かい詰めを行い、本年度中には、印刷・配布したい旨報告。
- デザイン保護委員会（泉）
  昨年6月29日～本年6月22日までの経過を示しながら、デザイン8団体との共同歩調を軸に、今後とも進める旨報告。
- IFI '95委員会（森谷）
  世界インテリアデザイン会議運営会における新年度第1回理事会開催報告、及び、JID内のIFI '95委員会は、年2回程度の調整会議を主にしたい旨報告。
- 事務局移転準備委員会（森谷）
  移転を事故もなく、予定通り無事に終えたこと及び費用上も多くの協力を得ながら、ほぼ予算内に納まる見込みと報告。

(2) 平成6年度収支状況報告（6月末現在）

平成6年4月1日～6月30日までの収支状況について、特記される項目及び内容について資料に基づき報告。

(3) 関東通商産業局関係報告

去る6月28日、理事変更登記及び、資産変更登記完了届、平成5年度事業報告書及び収支決算書並びに平成6年度事業計画書及び収支予算書、定款

変更認可申請書をそれぞれ関東通商産業局通商課に提出完了した旨報告。

(4) 通産省関係人事異動

樋口　勉(新)検査デザイン行政室室長
(旧)基礎産業局総務課企画官

玉木　昭久(新)中小企業庁・地域中小企業振興室室長
(旧)検査デザイン行政室室長

菅沼　義夫(新)検査デザイン行政室総括班長
(旧)資源エネルギー庁海洋開発室資源班長

遠藤　善久(新)生活産業局日用品課課長
(旧)経済協力開発機構日本政府代表部参事官

田勢　修也(新)生活産業局住宅産業課課長
(旧)国土庁長官官房参事官兼地方振興局地方産業振興室室長

太田　房江(新)近畿通商産業局総務企画部部長
(旧)生活産業局住宅産業課課長

(5) その他

- 協会名など新・清刷について
- 平成6年度第3回理事会予定(10月中旬/名古屋)

議長は報告事項について了承を求め、理事会はこれを了承した。

「日本のデザイン 1950年～」フィラデルフィア美術館に招待されて

関東事業支部会員　田辺　麗子

9月25日から開催される展覧会に先立ち22日夕、美術館で内見を兼ねたオープニングパーティーがありました。この展覧会は、美術館のキュレーターであるF.フィッシャー女史とK.B.ヒーシンガー女史が5年間をかけて日本のデザイン界を網羅的に調査した結果、255点のファッション、グラフィック、プロダクト等の作品が選ばれ展示されました。

美術館は1876年に、この地で行われた万国博に竣工した建物だそうで、会場の展示構成は黒川紀章氏の設計によりシンプルで見やすい会場でした。

なぜ、いままで世界に向けてこのようなデザイン展を

「日本のデザイン1950年～」にて田辺麗子会員

フィラデルフィア美術館会場風景

日本ができなかったのか、なぜフィラデルフィアなのか、と、とかくセクショナリズムになりがちな日本のデザイン界や日本の文化への取り組み方を反省せざるを得ません。この展覧会は、われわれにとっては、日本を愛し、深く理解するアメリカ人の目を通して、日本のデザイン文化を概観できるということに意義があるとは思いますが。

もっと広く見れば、第三者であるという公正さな目から、近代日本の文化の成熟の過程を通して、現代の肥大した日本を見るという、皮相さを世界に示すことになったと言った方が良いかも知れません。

オープニングの華やかさ、盛大さはアメリカ人らしいのですが、日本のデザイン関係の方は少なく、アメリカ人で盛り上がった観があります。パンフレットは勝井三

雄氏による実に美しい立派なものです。皆さんの目に触れると思いますが、来春から日本をはじめ、世界の何カ国かを巡回する予定だそうです。

新宿・OZONE見学とJID事務局訪問

関東・交流委員会委員　吉井　祐子

7月26日、リビングデザインセンターと名うった、オープンしたばかりの“OZONE”の見学会を行い、総勢43名の会員にご参加いただき、新しい情報を楽しく収集できました。

はじめに、OZONE事業推進グループ・マネージャー田原敦男氏からオゾン＝0（ゼロ）ゾーンで「出発点、これからの可能性」の意味である旨等の全体説明をいただき、さらに、この事業計画に参画された我がJID報酬基準委員会白石担当理事から「快適居住空間づくりのための情報センター」というコンセプトの概略説明を受け、各自それぞれで、見学をしました。単にインテリアショールームの集合体というだけでなく、情報発信基地、情報バンクをめざしたという構成は、1方通行の情報発信だけでなくプロユースにも耐える内容づくりを目指していることが感じられました。

JIDの賛助会員8社を含む17社のブース、1000冊を越える専門図書、海外および国内デザイン雑誌、200冊のライブラリー、そして各社サンプル、カタログ資料、空間のシミュレーション画面等、セカンドオフィスとしても利用できそうです。

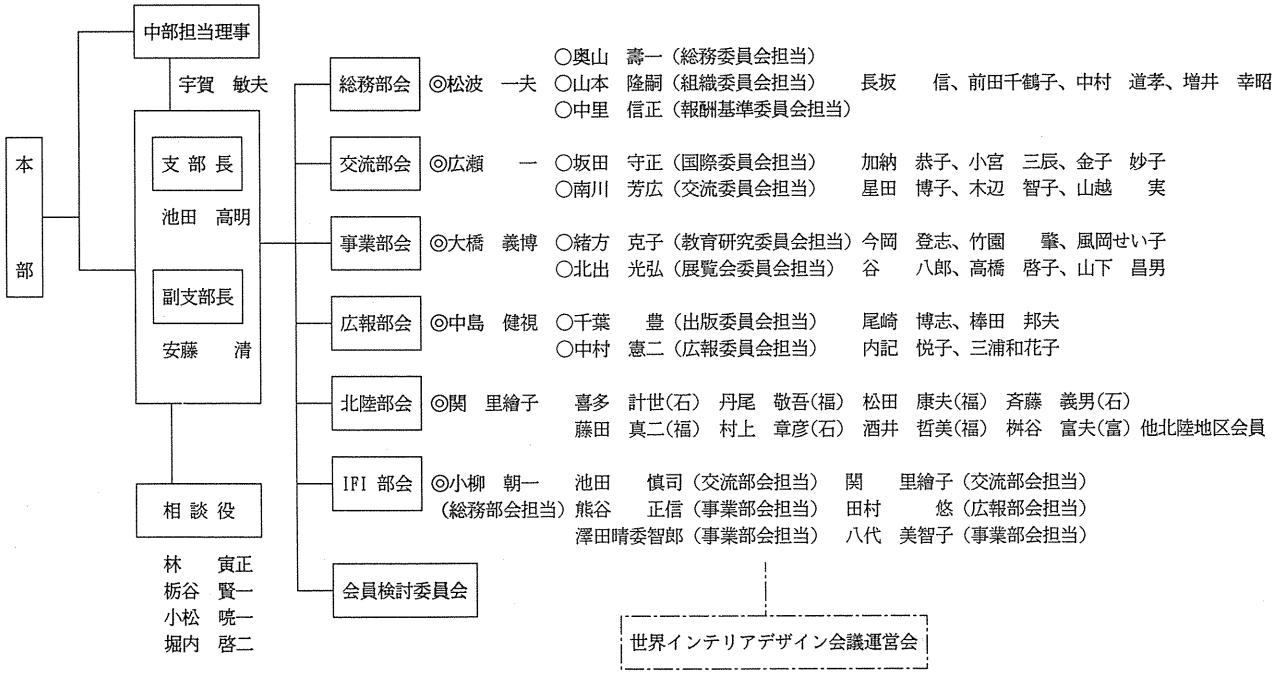
1日、5,000名～8,000名の見学者が訪れ、開館以来合計75,000人の見学者があったそうですが、ゆっくり見学するには午前中がお勧めとのことです。水曜日が休館日です。

〈特報！〉 JID事務局が使いやすく、きれいになりました！“OZONE”の8階におさまって、眺めの抜群な会議室もできました。これから、ますます活躍する協会にふさわしく、りっぱな事務局です。

●下図は中部事業支部運営組織図です。JID NEWS 7・8月号13頁に掲載したものに、変更がありましたので再度掲載いたします。必要なときには本図をご参照ください。

平成6～7年度　中部事業支部運営組織図

◎部会長　○副部会長



註：各副部会長は、本部委員会の委員として本部との連携を図る。
IFI部会は世界インテリアデザイン会議との連携を図るための部会で、平成7年度までの暫定部会。
会員検討委員会は、主に、新たな入会希望者の予備審査を行なうため、必要に応じて運営委員会内に随時開催する委員会。

会員の異動

● ご面倒でも「会員名簿」の該当ページを開けて、ご訂正下さい。

● **正会員**

会員名	異動事項	新
岩倉榮利 （関東　P56）	事務所移転	株式会社　岩倉榮利造形開発研究所 東京都渋谷区松濤 1-17-16　〒150 TEL 03-5478-8666　　FAX 03-5478-8680
大場康博 （関東　P63）	事務所移転	東京都渋谷区西原 1-45-1　〒151
篠崎秀一 （関東　P86）	自宅移転 勤務先	自宅：大阪府東大阪市荒川3丁目 5-6 MMビル503　〒577 TEL・FAX 06-723-8289 勤務先：株式会社　エイド 大阪府大阪市中央区谷町 3-2-15　松本ビル 4F　〒540 TEL 06-943-4035　　FAX 06-943-4086
下川裕道 （関東　P88）	自宅移転	茨城県稲敷郡茎崎町富士見台 33-240　〒300-12
道明三千代 （関東　P105）	自宅移転	東京都荒川区南千住 8-51-1-209　〒116 TEL 03-3801-7269
中川誠一 （関東　P106）	自宅移転	東京都国分寺市日吉町 1-6-48　〒185 TEL・FAX 0423-27-3393
福田友美 （関東　P119）	自宅 住居表示変更	神奈川県横浜市港筑区茅ヶ崎南 4-14-1001
森本勉 （関東　P136）	新：FAX	FAX 048-884-3494
山本桂 （関東　P141）	国内・自宅移転	北海道札幌市北区北35条西3丁目 1-26　〒001 TEL 011-726-7809
野原建広 （関西　P181）	勤務先 自宅移転	秋田木工㈱　大阪営業所　課長 大阪府吹田市広芝町 7-21　アズマビル 4F　〒564 TEL 06-384-8733　FAX 06-384-9028 兵庫県川西市鶯台 1-18-8　〒666-01
早川満利 （関西　P182）	自宅移転	兵庫県川辺郡猪名川町伏見台5丁目 5-41　〒666-02 TEL 0727-66-8591

● **賛助会員**

ウィルクハーン㈱ （賛助）	移転	東京都港区六本木 5-17-1　AXIS ビル 2F　〒106 TEL 03-5573-2411　FAX 03-5573-2413
住商インテリア㈱ （賛助　P214）	移転	東京都千代田区神田錦町 3-24-1 住友商事栗田ビル　〒101 TEL 03-5281-0061　FAX 03-5281-0063
㈱西武百貨店 （賛助　P214）	担当者	東京都豊島区池袋 1-16-22　西武流通事務館 2F　〒171 外商事業本部　設計部　滝沢部長

ホウトク販売株式会社
インテリア設計営業部
〒114 東京都北区田端6-1-1 田端ASUKAタワー
TEL 03-3824-6411 FAX 03-3824-6412
インテリア設計営業部 部長 村田守久

㈱マルニ・ファニシング事業部
〒271 千葉県松戸市松戸1307-1 松戸ビル3F
TEL 0473-62-0202 FAX 0473-61-0289
企画課 松田光仍

細田木材工業株式会社
〒136 東京都江東区新木場2-15-28
TEL 03-3521-8701㈹ FAX 03-3521-8708
インテリア事業本部 部長 内林正司

丸福繊維株式会社
〒590-05 大阪府泉南市信達牧野376
TEL 0724-82-2162 FAX 0724-83-4353
代表取締役 梶本典暉

松川室内設計工程㈱公司
台湾省台南市健康路2段193号
TEL 001886-06-291-3955 FAX 001886-06-291-3961
郭 文欽

三國商工株式会社
〒101 東京都千代田区外神田1-11-5
TEL 03-3253-3920 FAX 03-3255-3920
常務取締役第二事業部長 大石忠久・営業5課長 皆川裕行

㈱松坂屋上野店
〒110 東京都台東区上野3-29-5
TEL 03-3832-1111
東京建装事業部工務部設計課 建多直樹

株式会社ミサワホーム総合研究所
〒168 東京都杉並区高井戸西1-1-19
TEL 03-3332-5111
取締役技術開発部長 安藤直人

松下電工株式会社
〒571 大阪府門真市大字門真1048
TEL 06-908-1131㈹
デザイン部 部長 山本陽一

三井デザインテック株式会社
〒163 東京都新宿区西新宿7-5-25 西新宿木村屋ビル
TEL 03-3367-3131 FAX 03-5386-7745
デザイン商品部 島村一志

1994/10

1994年10月30日発行　（社団法人 日本インテリアデザイナー協会月報1994年通巻183号）

編集／発行・社団法人 日本インテリアデザイナー協会事務局　印刷所・有限会社 コーエイ企画
〒160 東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー8F
TEL 03-5322-6560 FAX 03-5322-6559